

# 朝日 歌壇 俳壇



〈ウメIV〉 日高理恵子

高野公彦選

海埋める真金ためる兵器売る素敵な国の主権者ぞ我 (朝霞市) 岩部 博道  
 ☆能登に降る雪の予報の声播らへA-Iの音声でない声 (奈良市) 山添 聖子  
 「水が出た」老いし夫婦は涙みみて蛇口に幾度も手を合わせおり (福山市) 金尾 洵子  
 元日が命日となりし人を視すなおも進める原発稼働 (佐倉市) 中村 寛  
 ☆原子炉を秘めて大型空母来る橋媛の入水の沖を (三浦市) 秦 孝浩  
 ふつくとせし信楽の花瓶買ふ断捨離中だが臘梅活けむ (坂戸市) 納谷香代子  
 旧友のウォルターが遂に出所せり四十五年の服役のあとに (アメリカ) 郷 単人  
 母の声聞き取れぬほど微かなり「あり」で始まる五音の言葉 (福山市) 倉田ひろみ  
 ☆妻逝きてはじめての冬ひとりきり小さな家の大きな寒さ (館林市) 阿部 芳夫  
 若いころふんと思っていたようなことをする (青森市) 佐野 橙子

【評】一首目、したい放題の政府、それを許す主権者たちの一人である自分。鋭い批判と自嘲を籠めた作。二首目、能登の人々の苦しみを思い、アナウンサーの音が調む。五首目、横須賀沖の走水の海で入水した第橋媛の伝説を踏まえた作。

永田和宏選

☆能登に降る雪の予報の声播らへA-Iの音声でない声 (奈良市) 山添 聖子  
 軒ごとの「危険倒壊」見やりつつ水真はむと地割れの路ゆく (七尾市) 田中 伸一  
 珠洲原発を造らせなかつた闘いは正しかったといま胸を刺す (東京都) 十亀 弘史  
 玉川の岩盤浴に伏せおれば音もなく降る雪の音聞く (川越市) 吉川 清子  
 ひらがなのふの字はたのしからだちゆうふふとゆらしふふとわらふ (会津若松市) 鈴木 恵子  
 良心の呵責ではない 死の前に自分に戻りたかった「桐島」 (観音寺市) 篠原 俊則  
 半世紀近くを別の名で生きて気づかれなかつたことの寂しさ (千葉市) 高橋 好美  
 杉に生れ杉に生きにし父なれば斧を埋けにつし納が下 (中間市) 本田 信道  
 古参囚のW.A.L.L.Y.が今朝仮釈放された四十五年の懲役を経て (アメリカ) 郷 単人  
 連結音さびしく響く雪の日の君立つ駅のわが中 (垂水市) 岩元 秀人

【評】山添さん、人の声だからこそ、能登の雪を予報する時に一瞬声が揺らいだのだ。田中さんは被災者。危険は承知で生きるための水の確保が最優先。十亀さん、30年近く続いた珠洲原発反対闘争、あの時もし闘争が敗れていたら今ごろは、と。

馬場のき子選

☆物質へばお釣りのあること知らぬまま幼子育つデジタル社会 (酒田市) 朝岡 剛  
 高齢者施設入居の夫を想いひとりチエロ弾く八十九の春 (我孫子市) 金井 明美  
 出産とう大仕事終え牛小屋の隅に寝る子を舐める母牛 (佐世保市) 近藤 福代  
 ☆妻逝きてはじめての冬ひとりきり小さな家の大きな寒さ (館林市) 阿部 芳夫  
 引き出しの奥の毛糸のくつ下に編み込まれたる祖母の時間よ (奈良市) 山添 聖子  
 異次元へ消えゆくやうに地吹雪の中へ侵入する青きバス (札幌市) 伊藤 哲  
 地震ふりて地盤が隆起した珠洲のゴジラ岩吼ゆ藻を纏ひつつ (箕面市) 大野美恵子  
 海底に昏きトラフを潜ませて相模の灘は静かに眠る (東京都) 三角 逸郎  
 生活保護費よりも少ない年金に縋って眠る八十二歳 (近江八幡市) 寺下 吉則  
 ☆原子炉を秘めて大型空母来る橋媛の入水の沖を (三浦市) 秦 孝浩

【評】第一首は買い物時によくある「お釣り」という場面が、デジタル化によりなくなることに心をとめる。そこにわずかだが人間的な交流があったと思うからであろう。第七首のゴジラ岩の光景、きびしいが象徴的な珠洲の心か。

佐佐木幸綱選

☆物質へばお釣りあること知らぬまま幼子育つデジタル社会 (酒田市) 朝岡 剛  
 偶然と気分が決まる手帳の色今年深緑ほっとする色 (横浜市) 森 明子  
 ヒーターと干し草敷かれ冬眠をさせてもらえぬ次男のトカゲ (さいたま市) 齋藤 紀子  
 おばあちゃん好きになつてと言われてもトリケラトプスは好みじゃないの (新潟市) 野澤 千恵  
 時国家の北前船も来ただろう備前下津井春の雪降る (岡山市) 三好 英男  
 ヌンチャクを知らぬ生徒に香港の女性講師が技・声披露す (朝霞市) 青垣 進  
 進路指導終えて教室より見ればいつもの風電いつもの速度 (長岡京市) 森 佳代子  
 庭に出て朝しぶき見て足とめるクジラが泳ぐ海が目の前 (東京都) 三輪 裕子  
 沖合にクジラのやうな鳥ありて午前中から興居島といふ (松山市) 宇和上 正  
 等身大の選手の写真はりつめた阪神電車みな名がわかる (西宮市) 夏川 直

【評】第一首、「おつり」という言葉が通じない時代が来るかも知れない、そんな視点にびっくり。第二首、新しい手帳をどう選ぶか、毎年、一首作ってみたい気分がにさせられる。第三首、冬眠しようと思ってもできないトカゲ。飼い主は何歳なのか。

俳句時評 創作の原動力

今回は、二冊の句集を紹介したい。岩田奎の第一句集『膚』(ふらんす堂)。2020年に史上最年少で角川俳句賞を受賞した岩田は、この句集で俳句協会新人賞を受賞した。書名は「事物の表面にある、ありのままのグロテスクな様相を写しとること」への思いを含む。「逃水をしつ唇の皸割れて」は、捉えどころのない逃水の発生を伝える人の唇の皸割れに焦点を当て、その瞬間が確実に存在したことを言い留める。同じく盛氣

を描写した(盛氣はこぼれくるはアジフライ)は海という詩情の一方、親しみのある食べもので現実を実感させる。もう一冊は、佐藤文香の『こゑは消えるの』(港の人)。佐藤は詩集『渡す手』(思潮社)が中原中也賞に選ばれたばかりだが、この句集は一年間のアメリカ滞在期間の作品をまとめたものだ。「誰かに語って聞かせるほどでもないこと」を受け止める俳句という器が、海外での創作に適したという。タイトルと待たれる。

風信

黒木三千代歌集「草の譜」 約30年ぶりの第3歌集。巻末に未来短歌会の師・岡井隆への挽歌を収録。〈「恩ぶ会」用の数葉借りて来て先生に逢ふ素の先生に〉(砂子屋書房・3300円) 笹公人著「NHK短歌 シン・短歌入門」52のQ&Aや穴埋め問題などを通し、わかりやすく作歌のコツを伝える。発表前に確認すべき10項目も収録。(NHK出版・1760円)

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほかき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。